

# 梵文断簡 Nidānasamyukta

伴 戸 昇 空

## 一 テキスト解説

本論文では、Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta, Berlin, 1962 をテキストとして用いた。これは、Chandrabhai Tripāthi の校訂で、Sanskrittexte aus den Turfanfunden (Herausgegeben im Auftrage der Akademie von Ernst Waldschmidt) の第八巻として出版されたものである。本論文の目的は、この校訂本のもとになった梵文写本の伝承部派の考察にある。

C. Tripāthi が校訂に用いたところの主たる梵文手写本 (die Haupthandschrift) は、Albert Grünwedel と Albert von Le Coq の率いる第三次ペロシヤ・トルファン探險隊 (die dritte preussische Turfan-Expedition, 1905-1907) によ

って、カラシャール (Qarasahr) の傍にあるシヨルチク (Sörcük) の遺跡で発見されたものである。この梵文手写本は、Göttingen Katalognummer S 474 と記号され、その主要部分は十六葉からなっているが、最初の数葉及び最後の二・三葉の保存状態は、極めて、或いは、相当悲観的なものである。このうち略完全な形のまま発見された数葉は、並外れて大きな形をしており、約 52.2 cm × 13 cm の寸法を有する<sup>①</sup>。材質は紙。文字は早期中央アジアブラーフミー (der älteren zentralasiatischen Brahmi)。紙葉の両面に十一行宛、毎行約六十〜七十文字 (akṣara)、比較的大きく明瞭に記されている。又、紙葉には、左端から略 12.8 cm の所に、直径約 1.8 cm の、紐穴が穿っている。この紐穴はほとんどの場合六行目中にあり、その記述を分断す

る様な体裁になっている。比較的保存状態の良い紙葉には、常に表側左端の余白に、紙葉番号が見られ、又、多分 *nidanasamyukta* の略であると思われる *nidana* という文字が、行に対して垂直もしくは水平に、より小さく記されている。

この梵文手写本 (S 474) は、C. Tripathi の校訂本の出版に先立って、部分的にはあるが、E. Waldschmidt によっても研究され、発表されている。Waldschmidt は、まず、その論文 *Identifizierung einer Handschrift des Nidanasamyukta aus den Turlanfunden*, ZDMG, 1957, Bd. 107 に於いて、当時はゲッティンゲンにあったこの梵文手写本 (S 474) をとりあげ、この梵文が漢訳雜阿含經 (283~303, 343~346) とパーリ文 *Nidanasamyutta* (SN, Vol. 2) の一部とに相当することを指摘し、又、あわせて、第一經・第二經の校訂梵文並びにその独訳、及び、第三經・第四經に相当する漢訳雜阿含經 (285, 286) の独訳を発表した。次いで、彼は、同じく S 474 中より、第二十五經にあたる部分の断簡をとり上げ、その論文 *Sutra 25 of the Nidanasamyukta*, BSOAS, XX, 1957 に於いて、その漢訳相当經である雜阿含經 (346) の英訳、及び、パーリ文相当經 *Dasakanipāta, Sutta 76 (AN, Vol. 5)* と対照並

記された第二十五經の復元梵文を発表している。

C. Tripathi の校訂本は、これら Waldschmidt の研究成果に基づいて、作成されたものである。そこで、彼は、S 474 中に見出される二つの撰頌 (*uddāna*) に各經の標題を (*das Stichwort*) 求め、二十五經の梵文をローマ文字にして校訂し、その独訳と註釈を施している。

しかし、彼は漢文には不案内らしく、S 474 の梵文はパーリ文とよりもむしろ漢訳の方と緊密な対応関係にあるにもかかわらず、彼の校訂本には、漢訳經典に関する註記は殆ど見あたらない。いくつか記されているものも、大部分、Waldschmidt の前掲論文からの引用である。又、当該写本では、内容を同じくするところの二經が連続して記される場合、後続する方の略全文を省略し、唯、覚え書き程度の記述にとどめる傾向が認められる。即ち、第七經・第八經及び第二十經・第二十一經に於いて、後続する方の第八經と第二十一經とが極端に短い記述しか有していないのがこれである。しかるに、彼は、内容を同じくし且つ連続して記されるところの第三經・第四經の梵文復元に際し、全く同一の梵文をこの二經にあてているのは何故であろうか。確かに彼の校訂は厳密ではあるが、これら二・三の事柄に關して言うならば、少しく納得し難い点もある様に思われ

る。

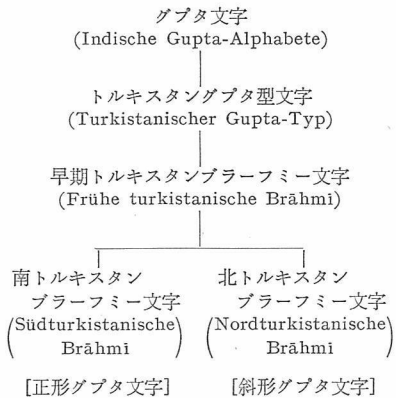
猶、校訂本には当該写本の写真は附されていないが、Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden, Teil II, Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Band X<sub>2</sub>, Wiesbaden, 1968 に写真版が収められていて、参照の便がある。

二 作成年代

一般に写本の作成年代を決定する最も有力な方法は、ここに記されている文字の使用年代を調査することである。

中央アジアの古文字学関係のまとまった研究書としては、Lore Sander の Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung, Wiesbaden, 1968 があり、この研究成果に従って話を進めることが、現在の目的に最も適していると思われる。彼は、この書で、プロシア・トルファン探險隊がドイツにもたらしたところの梵文手写本を、その文字によって十二種類に大別している<sup>⑦</sup>。それら十二種類のうち実例の示されている十種類のものとは比較対照してみると、当該写本(S.54a)の文字は、グプタ文字の流れをくむところの早期トルキスタンブラーフミー文字と略合致する。グプタ文字とは周知の如く四世紀

に興ったところのグプタ朝の頃より始まった文字のことであるが、それは中央アジアに伝えられて、そこで大凡次の様な変化を辿った。



ここに言う北トルキスタンブラーフミー文字とは所謂斜形グプタ文字のことであり、南トルキスタンブラーフミー文字とは正形グプタ文字のことである。周知の如く、タリム盆地をはさんで、シルクロードの北道上には斜形グプタ文字が、又、南道上の特にコータン附近には正形グプタ文字が発達した。ところで、当該写本(S.54a)は、タリム盆地の北側、シルクロードの北道近くにあるシヨルチュク(S.50a-

ṣuṅ)で発見されたものである故、今最も問題になるのは、近接した北道上に於ける文字の発達史である。

さて、中央アジアに於ける所謂グプタ文字の変遷は、まず四・五世紀頃に Kalpanāmanditika に代表されるような北西インドのグプタ文字で書かれた諸写本が、仏教の伝道者達によって、この地にもたらされたことに始まる。これら北西インドからもたらされた諸写本は所謂具多羅葉 (tāla-patra) に書かれていたのであるが、中央アジアに於いては、それとほとんど変わらない文字で書かれた紙葉写本がいくつか発見されている。例えば、H. Härtel が Kar-mavācānā, Sanskritexte aus den Turfanlunden III, Berlin, 1956 で扱ったこの Karmavācānā の紙葉写本等がそれである。恐らく、これらの紙葉写本は、インドからもたらされた具多羅葉写本から直接臨書されたものであるうと思われるのであるが、そこに見られるところの、北西インドのグプタ文字と極近似した文字がトルキスタングプタ型文字 (Turkistanischer Gupta-Typ) と呼ばれるものである。具多羅葉から紙葉への書写は中央アジアへのインド原典の伝播に平行して行なわれたであろうから、この文字の使用時期も四・五世紀頃に想定して大過なきものと思われる。

トルキスタングプタ型文字がグプタ文字からほとんど変化しなかったのに対し、次に続く早期トルキスタンブラーフミー文字 (Frühe turkistanische Brāhmī) は、グプタ文字とかなり明らかな相違を示す様になってくる。その最も顕著な特徴は、乃至 a. の母音記号に見られる。グプタ文字及びトルキスタングプタ型文字では、乃至 a. の母音記号は必ずその上端を左に振っていたが、早期トルキスタンブラーフミー文字には右に振るものが現われてくる。この特徴によって、早期トルキスタンブラーフミー文字は、先のトルキスタングプタ型文字と一線を画されるのであるが、当該写本 (S 474) にもこれと同様の特徴が見られる。

次に、シルクロードの北道上には、北トルキスタンブラーフミー文字 (Nordturkistanische Brāhmī) が現われる。北トルキスタンブラーフミー文字、即ち、斜形グプタ文字は、その名の示すとうり、全体に傾いた形をしている。又、早期トルキスタンブラーフミー文字では a, ā, ya は上端が開いていたが、斜形グプタ文字では閉じてしまう。しかし、この様な特徴は、当該写本 (S 474) には全く認められない。

この様な手続の後、早期トルキスタンブラーフミー文字と当該写本 (S 474) を、その一字一字に関して綿密に比較

対照を試みた末、この二つの文字は略、同一のものと確信するに致った。では、早期トルキスタンブラーフミー文字の使用年代は何時頃であったのだろうか。この問いに直接答えてくれるものは、現在のところ、何も見あたらぬ。そこで、先に述べたところの文字の発達史に於ける前後関係から推定する以外に方法は無い。

まず、その上限は、この文字に先行するトルキスタングプタ型文字の使用年代を四・五世紀に想定していることから、五世紀頃と考えて間違いないであろう。次に下限であるが、それはこの文字に続いて現われる北トルキスタンブラーフミー文字が何時頃から使用され始めたかということが分かれれば、略、想像がつく訳である。この文字の使用年代に関する最も確実な情報は H. Lidzbarski によってもたらされている。彼は北トルキスタンブラーフミー文字で書かれた賜与文書 (Schenkungsurkunden) を研究して、それが七世紀の初頭、クチャを支配していたスヴルナプシュバ王 (Suvvarnapusa) の統治時代のものであることを解明し、この時期に、既に、北トルキスタンブラーフミー文字は十分に発達していたと推論している<sup>⑨</sup>。そうだとすると、この文字に先行する早期トルキスタンブラーフミー文字の使用されていた時期は、略、六世紀の終わり頃までであったと考

えてよさそうである。

かくして、早期トルキスタンブラーフミー文字の使用年代は略、五・六世紀頃ということになり、当該写本 (S. 51) の作成年代も、又、この時期内に想定出来得ることとなる。

### 三 伝 承 部 派

一般に、經典の伝承部派を決定するには、まずその經典の記述内容を手掛かりとすることが最も望ましい方法であると思われる。しかし、当該写本 (S. 51) の場合は、律や論ならぬ阿含の断簡である故、その方法によることは必ずしも容易ではない。そこで、次に考えられる方法は、写本の発見地附近に於ける宗教事情を歴史的に調査することである。即ちこの場合、それは、当該写本の作成年代前後の時期に、その発見地附近では如何なる部派の仏教が行なわれていたかを調べることである。今はまず、この後者の方から検討してみようと思う。

それでは、当該写本 (S. 51) が作成されたと推定される五・六世紀頃の中央アジア、それも特にその発見地であるショルチュク附近の仏教事情は如何なるものであったのだろうか。当時の中央アジアの仏教事情に関する直接の記録は二つしかない。それは言うまでもなく、法頭の高僧法頭

伝と玄奘の大唐西域記の二つである。前者には五世紀初頭頃の、又、後者には、少しく時代を下り、七世紀前葉頃の西域に関する記述が見られる。

まず高僧法顕伝には次の如く記されている。「以弘始二年歳在己亥。与慧景道整慧心慧鬼等。同契至天竺。尋求戒律。初发跡长安。到燉煌。行十七日計可千五百里。得至鄯都国。其国王奉法。可有四千余僧。悉小乘学。诸国俗人及沙门尽行天竺法。但有精麈。從此西行所经诸国类皆如是。唯国国胡语不同。然出家人皆习天竺书天竺语。复西北行十五日到乌夷国。僧有千余人。皆小乘学。法顕等蒙符公孫供給。遂得直進西南。在道一月五日得至于闐。衆僧乃数万。多大乘学。」(大・五十一・八五七a、b)即ち、法顕は弘始二年(A.D. 399)天竺をめざして四人の同志とともに長安を出発し、順次、鄯都国(Miran)→烏夷国(Garasahr)→于闐(Khotan)という道を辿ったというのである。ところで、問題のシオルチュクはカラシャール即ち烏夷国の南西に略、隣接して位置する故、恐らくはシオルチュクの仏教事情も、カラシャールのそれと軌を一にしていたものと思われる。法顕の記するところによると、当時カラシャールには四千余人の僧があり、皆小乗を学んでいたという。又、鄯都国の記述に、

ここ(鄯都国)より西に行くに経る諸国では、おおむね国々の胡語は異なるも、出家人は皆天竺の書と天竺の語を習っていたとある。ここに言うところの「天竺書」とは、先述の中央アジアに於ける文字の発達史から推量すると、具体的にはグプタ文字・トルキスタングプタ型文字・早期トルキスタンブラーフミー文字あたりのことであると思われるし、又、「天竺語」とはサンスクリット語のことであろう。さて、カラシャールは鄯都国より西にある。従って、高僧法顕伝によると、五世紀初頭頃のカラシャール、ひいてはシオルチュクでは、小乗仏教が、グプタ文字乃至はその系統をひくブラーフミー文字で書かれたところのサンスクリット語によって学ばれていたということになる。しかし、ここに言う「小乗」が如何なる部派であったのか、法顕は何も記しておらず、明らかではない。唯、他の資料によると、同じくシルクロードの北道上に位置する龜茲では当時説一切有部が行なわれていた可能性が認められ、又、後に述べる様に、七世紀頃の北道上の諸国では、そのほとんどで説一切有部が行なわれていた様であるから、法顕がここで言っているところの「小乗」も説一切有部であったのかも知れない。

さて、次に大唐西域記であるが、こちらの方には先の高

僧法頭伝よりも遙かに明確な記述が見られる。天竺をめざ

挙すれば次のとおりである。

〔北道関係〕

阿耆尼国(大・五十一・八七〇a)

僧徒二千余人。伽藍十余所。習学小乘教説一切有部。

文字取則印度。微有増損。經教律儀既遵印度。諸習学者、即其文而翫之。

屈支国(大・五十一・八七〇a)

僧徒五千余人。伽藍百余所。習学小乘教説一切有部。

文字取則印度。粗有改変。經教律儀取則印度、其習読者、即本文矣。

跋祿迦国(大・五十一・八七〇c)

僧徒千余人。伽藍数十所。習学小乘教説一切有部。文字法則同屈支国、語言少異。

〔南道関係〕

瞿薩旦那国(大・五十一・九四三a)

僧徒五千余人。伽藍百有余所。並多習学大乘法教。文字憲章聿尊印度、微改体勢、粗有沿革。語異諸国。

斫句迦国(大・五十一・九四二c)

僧徒百余人。伽藍数十。習学大乘教。文字同瞿薩旦那

国。言語有異。

〔兩道分歧点〕

して貞觀三年(A. D. 629)に長安を旅立った玄奘も、又、途中でカラシャル(阿耆尼国)に立ち寄っている。その地について、玄奘は次の様に記している。「阿耆尼国。…文字取則印度。微有増損。…伽藍十余所。僧徒二千余人。習学小乘教説一切有部。經教律儀既遵印度。諸習学者。即其文而翫之。」(大・五十一・八七〇a) 即ち、七世紀前葉頃のカラシャルでは、小乗教の説一切有部が、印度の原文によって学習されていたというのである。ここに言うところの「其文」とは梵文即ちサンスクリット語のことであろうし、又、文字は手本を印度にとり、少しく増損していると言うのであるから、この地では、まだ当時、早期トルキスタンプラーフミー文字が用いられていたのかも知れない。従って、当時のショルチュクでも、又、事情を同じくし、小乗教の説一切有部が恐らくは早期トルキスタンプラーフミー文字で書かれた梵文によって学ばれていたものと推定されるのである。

猶、余談ではあるが、大唐西域記には当時の西域諸国の仏教事情に関するかなり詳細な記述が見られ、今、そこからシルクロードの北道・南道近辺の諸国に於ける、僧徒数・伽藍数・部派・文字・言語に関する事柄を摘出して列

佉沙国(大・五十一・九四二)

僧徒万余人。伽藍數百所。習学小乗教説一切有部。其文字取則印度。雖有刪訛頗存体勢。語言辭調異於諸国。

これら、大唐西域記に見られる以上の記述から、シルクロード北道沿いの諸国では説一切有部系の小乗仏教が、又、南道沿いの諸国では大乘仏教が、それぞれ受け入れられたのではないかと推測されるのである。

さて、話を本筋に戻し、以上に述べた事柄を整理して、今問題にしているシオルチュクの仏教事情について推測されることを纏めることにしよう。まず、高僧法顕伝の記述からは、五世紀初頭頃のカラシャル(烏夷国)では小乗仏教が学ばれており、その部派は説一切有部であった可能性があるということが分かった。次に、大唐西域記の記述からは、七世紀前葉のカラシャル(阿善尼国)では小乗の説一切有部が学ばれており、それは、シルクロード北道沿いの諸国でも略、同様の状態であったろうということが分かった。そこで、この二つの事柄から推して考えるに、適当な資料の無い五世紀中葉乃至六世紀後葉の時期に於いても、又、カラシャルでは小乗仏教が、それも恐らくは説一切有部が学ばれていた可能性が最も強いと思われるのである。そこで、シオルチュクの仏教事情も、又、カラシ

ヤールのそれと軌を一にしていたであろうとの想定に従って考えると、当該写本(S<sub>547a</sub>)が作成された当時、即ち五・六世紀頃のシオルチュクでは、小乗教の説一切有部が学ばれていたであろうと推論されるのである。

以上の様な歴史面からの考察によると、当該写本(S<sub>547a</sub>)は説一切有部所伝のものであった可能性が最も強いということになる。しかし、当該写本を説一切有部所伝のものとして断定するには、まだ二つの障害が残っている。その一つは、当該写本がシオルチュクで作成されたものであるという確証がないことである。今一つは、仮に当時シオルチュクでは説一切有部が学ばれていたとしても、だからと言って、その地に他の部派の經典が無かったとは決して言えないということである。この二つの問題は表裏一体であるとも言えるが、とにかくも、ここまでは、以上に述べてきたところの、歴史面から調査する方法の限界であると言えよう。それでは、当該写本そのものに、その所属部派を決定する手掛かりになるようなものが何かないであろうか。確かに一つはある。それは当該写本が、説一切有部所伝と考えられているところの漢訳雜阿含經と非常に緊密な対応関係を示すことである。話を進めるまえに、まず、当該写本(S<sub>547a</sub>)と漢訳雜阿含經及びパーリ文 Nīdanasariyutta と



の対照一覧表を掲げよう。

S 474 Nidanasamyukta		漢訳雜阿含經		パーリ文 Nidanasamyutta	
經番号	經名	經番号	卷次	經番号	經名
1	vrkṣa I	283	卷第十二	57	taruṇa
2	vrkṣa II	284	卷第十二	58	nāmarūpam
3	dīpa I	285	卷第十二	53	saññojanam
4	dīpa II	286	卷第十二	52	upādāna
5	nagara	287	卷第十二	65	nagara
6	nāḍakalāpika	288	卷第十二	67	nāḍakalāpiyam
7	markata	289	卷第十二	61	assutavato
8	dvaṃyam kaṣṭhe	290	卷第十二	62	assutavā
9	kāṃsi	291	卷第十二	66	sammāsam
10	kumbha	292	卷第十二	51	parivimamsana
11	yo vadet	293	卷第十二		
				12	nivṛta
				13	na yuṣṣakam
				14	pratītya
				15	śūnyatā
				16	ādī-sitra
				17	bhikṣu
				18	brāhmaṇa
				19	Kāṭyāyana
				20	aceḷa
				21	timburuka
				22	(bhūmika)
				23	(dṛṣṭisampanna)
				24	(bhūtam idam)
				25	(abhaṃva)
		294	卷第十二	19	balena paṇḍitio
		295	卷第十二	37	na tumhā
		296	卷第十二	20	pacceyo
		297	卷第十二	35	avijjāpacceyā
		298	卷第十二	2	vibhaṅgam
		299	卷第十二		
		300	卷第十二	46	anhataram
		301	卷第十二	15	kaṅcāyanagottho
		302	卷第十二	17	aceḷa
		303	卷第十二		timbaruko
		343	卷第十四	25	Bhūmija
		344	卷第十四	MN. 9	sammadhīṭṭhisutta
		345	卷第十四	31. 32	bhūtam, kaḷāra
		346	卷第十四	AN. X. 76	abhaḅho

この一覧表から解かる様に、当該写本 (S 474) 中の諸經の配列順序は、漢訳雜阿含經のそれと全同である。ただし、当該写本には、漢訳雜阿含經の卷第十三に対応するところの三十九經を欠くが、これについては後に譲る。又、さらに、当該写本と漢訳雜阿含經は諸經の配列順序を同じくするのみならず、その対応する一一の經を比較対照してみると、両者の間には略、逐語的とも言える程の緊密な対応関係が認められるのである。思うに、この両者は同じ系統の

梵文原典から書写乃至翻訳されたものではなからうか。<sup>⑭</sup>

ところで、先にも述べた様に、漢訳雜阿含經は説一切有部所伝のものと言われているが、その根拠は何処にあるのか。周知の如く、現在見るところの漢訳雜阿含經五十卷の巻次組織は、翻訳された当初の原形から相当掛け離れたものであると思われる。現在の漢訳雜阿含經は一三六二の經が單純に五十卷に分けられているにすぎず、もともとこれがいくつかの品に大別されていたことは、漢訳雜阿含經自身の中に断片的に残されている記述によって明らかである。その断片的記述とは、漢訳雜阿含經の數卷の初めに見られるところの、かつての品名区分の名残りと思われるものである。それは、即ち、次の如くにある。

卷第八 誦六入処品第二<sup>⑮</sup>

卷第十六 雜因誦第三品之四

卷第十七 雜因誦第三品之五

卷第十八 弟子所説誦第四品

卷第二十四 第五誦道品第一

これを手掛かりに、諸律典中に見出されるところの、雜阿含經の組織に関する記述を検討すると、漢訳雜阿含經のもともとの組織は、根本説一切有部毘奈耶雜事卷第三十九<sup>⑯</sup>及び瑜伽師地論卷第八十五<sup>⑰</sup>、それも特に前者に記されてい

るところの雜阿含經の組織に最も近似していることが分かった訳である。そこで、このことを根拠に、漢訳雜阿含經は説一切有部所伝のものであるとみなしているのである。

ところで、先にも述べたように、現在の漢訳雜阿含經の巻次組織は、原形のそれから相当に掛け離れたものである。そこで、当然、錯綜した漢訳雜阿含經の巻次組織を、翻訳当初の形に復元しようとする努力がなされる訳である。そして、姉崎正治氏がその著 *The four Buddhist Agamas in Chinese*, *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, XXXV, 3, 1908 で漢訳雜阿含經の原形に関する試案を発表されて以来、椎尾辨匡<sup>⑱</sup>、花山勝道<sup>⑲</sup>、前田恵学等<sup>⑳</sup>の諸氏によっても、同様の試みが度々行なわれている。今、それら諸氏の案を、根本説一切有部毘奈耶雜事及び瑜伽師地論の記するところと並記して一覧表にすれば次のとおりである(次頁参照)。

さて、ここで注目すべきは第三品である。この第三品に姉崎氏と花山(前田)氏は雜因誦と、又、椎尾氏は因縁誦と品名を与えているが、そこに割りあてる巻次並びにその配列順序に関しては全く意見を同じくし、卷第十二・十四・十五・十六・十七であるとする。それでは卷第十三は何処に含めるのか。それは第二品に割りあてられており、これ



又、諸氏ともに異論の無いところである。即ち、漢訳雑阿含経卷第十三は、もともと現在の位置にあつたものではなく、第二品からの混入であると思ふ点で、諸氏ともに一致している訳である。すなわち、推定される漢訳雑阿含経の原形において、第三品雑因誦は、卷第十二・十四・十五・十六・十七をその順序に含んでいたのであり、そこに卷第十三は含まれない。もはや多言を要しないが、これはまさしく当該写本(S474)と同じ構造になっている。先に当該写本には漢訳雑阿含経卷第十三に対応する三十九経を欠くと述べながらもその説明を保留していたが、ここに到ってその理由は明らかになった。即ち、当該写本に漢訳雑阿含経卷第十三に対応する諸経が欠けているのではなく、もともと雑阿含経(Sarvyuktāgama)の雑因誦(Nidānasaṃyukta)なるものは、当該写本(S474)に見られる様な構造になつていたものなのである。漢訳雑阿含経の雑因誦に於いても又然り。従つて、まさに当該写本(S474)は漢訳雑阿含経雑因誦の原形と同一の構造を有していることになるのである。以上に述べて来た事柄を総合するに、当該写本(S474)と漢訳雑阿含経は、恐らくは同系統の梵文原典に由来するものであると考へてよいと思はれるのである。

それでは、当該写本(S474)は、漢訳雑阿含経と同じく、

説一切有部所伝のものであると断定してよいであらうか。残念ながら、まだ断定はできない。確かに、これまで述べて来た事柄から判断して、可能性としては説一切有部所伝のものと考えるのが最も妥当ではある。しかし、当該写本と漢訳雑阿含経との両方にまだ少し問題があつて、その様に断定することには一抹の不安が残るのである。まず問題となるのは、漢訳雑阿含経は根本説一切有部毘奈耶雜事に見られる記述を根拠に、その所属部派が想定されているにもかかわらず、根本説一切有部(Mūlasarvāstivāda)所伝とはされず、説一切有部(Sarvāstivāda)所伝とみなされている点である。説一切有部(Sarvāstivāda)と根本説一切有部(Mūlasarvāstivāda)の關係は如何なるものであつたのだろうか。その両者はもともと別のものであつて、説一切有部(Sarvāstivāda)という名のもとに合流したものが、あるいは、又、説一切有部(Sarvāstivāda)から新たに根本説一切有部(Mūlasarvāstivāda)なる一派が分かれたものか、現時点に於いては定かではない。もっとも、その両派は同一の阿含經典を有していたのかも知れないのではあるが。次の問題点は当該写本(S474)が断簡であることにある。漢訳雑阿含経五十卷は説一切有部所伝のものと思はざれていくわけであるが、その中、雑因誦という一章の一部分だけに

おいて右に述べたようなこの写本断簡との確然たる対応関係が見られても、その他の部分において同様な事情が存在すると推断して妥当かどうかはなお確言できないし、他の部派の有した別系統の雜阿含經に同一の雜因誦(の一部分)が含まれていなかったと言えるだけの確証も無いように思われるのである。以上の事柄は俄には解決し難い問題であり、本論文では扱いきれず、今はただ指摘するにとどまるのみである。

以上が、当該写本(S474)の伝承部派に関して考察を試みた結果である。結局、いまだ少しく問題を残しながらも、可能性として、当該写本(S474)は説一切有部(Sarvāstivāda)乃至根本説一切有部(Mūlasarvāstivāda)所伝のものであると考えるのが、現在のところ最も妥当ではなうかと思われるのである。

註

① ドイツが有するトルファン関係の手写本で最も大きい物は、北トルキスタンブラーフミー文字で書かれたもので、153.5×64 cm もあるが、これは巻物である。一葉一葉分かれてゐる貝葉形式のものでは当該写本(S474)が最も大きな寸法を有す。Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden, Teil II, Wiesbaden, 1968, pp. 57~83 參照。

② ZDMG=Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft.

③ S 474 という記号は当該写本がゲッティンゲンにあった時 Frau Else Lüders にゆづり付られたものによる。(Katalog der Sanskrit-Turfan-Handschriften in der Akademie der Wissenschaften, I und II.) この写本は現在東京マリン大学、Katalognummer 381 と改められている。(Sanskrit-Handschriften aus den Turfanfunden, Teil II, Wiesbaden, 1968)。

④ この数字は大正新脩大藏經第二卷の雜阿含經中の諸經に付された通し番号である。283~303は雜阿含經卷第十二、343~346は同じく卷第十四の最初の四經である。

⑤ BSOAS=Bulletin of the School of Oriental and African Studies.

⑥ S 474 中には二つの撰頌(uddāna)が見出され、C. Tri-pāthi はこれを用いて各經の標題としている。しかし、第二十五經の後半以降にあたる部分の写本が欠如しているため、恐らくは第三十一經の後にあつたはずの第三番目の撰頌を確認できず、第二十二經~第二十五經の標題は、ハリー文相當經のそれによつて想定されている。

⑦ 彼の分類による十二種類を示せば次のとおりである。

- 1. I. Kuṣāna-Brahmi } Indische
- 2. II. Indische Gupta-Alphabete } Schrifttypen

3. III. Turkistanischer Gupta-Typ  
 4. IV. Frühe turkistanische Brāhmī  
 5. V. Nordturkistanische Brāhmī, Typ a  
 6. VI. Nordturkistanische Brāhmī, Typ b  
 7. VII. Sudturkistanische Brāhmī  
 8. SI. Gilgit / Bannyan-Typ II  
 9. SII. Sarada-Schrift  
 10. SIII. Pala-Schrift  
 11. SIV. Sondertyp der Gupta-Schrift  
 12. SV. Südinischer Schrifttyp
- } Turkis-  
 } tansche  
 } Schrift-  
 } typen
- } Sonderschri-  
 } ften
- Sonderschriften (例外文字・特殊文字)として一括されてくる五種類<sup>⑩</sup>の文字は、インドよりもたらされながらも、中央アジアの文字文化に全くその影響を残さなかったものである。L. Sander, „Paläographisches“, p. 6 参照。
- ⑪ インドでは、写本の素材として紙が用いられる様になったのは十三世紀頃のこと<sup>⑪</sup>、それは回教徒の影響による<sup>⑫</sup>と G. Bühler 主張<sup>⑬</sup>。G. Bühler: Indische Palaeographie, Strassburg, 1896, p. 91 参照。
- ⑫ H. Lüders: Zur Geschichte und Geographie Ostturketans, SPAW, Kl. phil.-hist., XXIV, 1922, p. 250.  
 猶、S. Lévi の同様の研究があるが未見である。S. Lévi: Le Tokharien B, JA, 11, 2, 1913, pp. 318~322, L. Sander: „Paläographisches“, p. 46 参照。
- ⑬ 他の資料とは高僧伝に見える鳩摩羅什の伝記である。羅什

は法顕が旅立って二年目 (A. D. 401) に長安に到着している。高僧伝巻二によると、彼は龜茲で生まれ仏教的環境に育ち、後、カンミールで小乗を学び、沙勒國 (Kashgar) で初めて大乘の教えに接したというのであるから、当時龜茲では大乘は学ばれていなかったということになる。さらに彼は龜茲にもどって後、「至<sup>⑭</sup>年二十受<sup>⑮</sup>戒於王宮。從<sup>⑯</sup>卑摩羅叉<sup>⑰</sup>十誦律。」(大・五十・三三一a)とあるから、恐らくは当時龜茲では説一切有部が学ばれていたのではないかと思われるのである。

⑭ 大正藏經の脚註に従って、「繪絹」ではなく「増損」の方を採用した。

⑮ 跋祿迦國はシルクロード上には位置しないが、その地は恐らく北道上を伝わったところの仏教の影響を受けたであろうから、今は仮に北道関係の方に入れておいた。猶、大唐西域記には、これより西方、縛喝國に致るまでの二十四國に関しては明確な記述を欠き、その内五國の記述に僧徒數・伽藍數有るを見るも、すべて大・小乗の別並びに部派を記さず。又、西北インド近辺の西域諸國には大乘國・小乘國種々有り、そのうち小乗は説一切有部が最も多く、他に大衆部・説出世部各一有り。

⑯ これより西、活國に致るまでの十四國中、部派を記するものは二國のみ。ともに説一切有部。活國は大・小乗兼学。部派は不明。

⑰ 岡谷蓬「梵語の阿含經と漢訳原本の考察」哲学雑誌・四八

三号・昭和二年・pp. 53~62 参照。岡氏はこの論文で漢訳雜阿含經の音訳語を梵語・パーリ語と比較し、雜阿含經の原典は梵文であったとする。

⑮ この品名に関する記述は、元・明の二本にのみ見られる。

⑯ 「但是五蘊相應者。即以蘊品二而為建立。若与六処十八界相應者。即以處界品二為建立。若与緣起聖諦相應者。即名緣起二而為建立。若声聞所說者。於声聞品處二而為建立。若是仏所說者。於仏品處二而為建立。若与念處正勤神足根力覺道分二相應者。於聖道品處二而為建立。若經与伽他相應者。此即名為相應阿笈摩。」(大・二十四・四〇七b)

⑰ 「雜阿笈摩者。謂於是中一世尊觀待彼彼所化。宣說如來及諸弟子所說相應。蘊界處相應。緣起食諦相應。念住正斷神足根力覺支道支入出息念学証淨等相應。又依八衆說衆相應。後結集者為令聖教久住。結噀拈南頌。隨其所心。次第宣布。」(大・三十三・七七二c) この瑜伽師地論卷第八十五の記述は、説一切有部乃至根本説一切有部所伝の雜阿含經に關

して述べたものと思われる。赤沼智善「仏教經典史論」(破塵閣書房・昭和十四年)二七頁、水野弘元「部派仏教と雜阿含」(国訳一切經阿含部一・雜阿含經新解説・昭和十四年)430~431頁参照。

⑱ 椎尾弁匡訳「新訂雜阿含經」(国訳一切經阿含部一・大東出版社・昭和十年)。

⑲ 花山勝道「雜阿含の原型に関する考察」(印度学仏教学研究・第二卷第二号)、「雜阿含の現在形成立年代について」(同・第三卷第一号)。

⑳ 前田惠学「原始仏教聖典の成立史研究」(山喜房書林・昭和三十九年)六四八~六六二頁。

㉑ 別派が合流したとするもの。E. Frauwallner: The Earliest Vinaya and the Beginnings of Buddhist Literature. Serie Orientale Roma VIII, Roma, 1956, 24~41.

㉒ 新旧二派とするもの。高楠順次郎「新文化原理としての仏教」(大蔵出版社・昭和二十一年)二五二頁。

(本学大学院博士課程 仏教学)